OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞　沢山美果子『近代家族と子育て』
Author(s)	牟田, 和恵
Citation	歴史学研究. 2014, (919), p. 33-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68077
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書　評

沢山美果子『近代家族と子育て』

牟　田　和　恵

Ⅰ　タイトルとカバーに込められた意図

本書は著者が25年にわたって「近代家族」をめ

ぐって考究を深め論じてきた稿をもとにし，あらためて加筆修正したものをまとめた論考である。まずはその粘り強い研究姿勢に敬意を表したい。

こうしたテーマに関心のある者にとっては，表紙カバーは嬉しいプレゼントだ。1918（大正７）年刊行『婦人世界』（婦人世界社）新年号の付録とされていた「婦人生ひ立ち双六」画が，カバーの表裏にあしらってあるのだ。幼児（おさなご）がふりだしで，母親による家庭教育を受けつつ女学生となり成長していくといった過程を経て，花嫁姿での結婚が上りとなっているこの双六は，遊びを通じて女性たちに当時の女性としてあるべき姿を示していたのだろう。今では「昔ながらの」「伝統的な」と思われるであろうそうしたライフコースは，しかし，決して伝統的であったわけではない。この時期，都市化と産業化の進行によって，家族のありかたや男女の性別役割規範が変化しつつあり，この双六が雑誌メディアの付録であったことからわかるように，婦人雑誌を購読しているような層がその担い手であった。本書がとらえようとするのは，まさにこうした家族である。

そして，著者の視点は，「近代家族と子育て」のタイトルにあらわれているように，「近代家族を自明の前提としてそこでの子育てのありようを問うのではなく，近代の子育てにあらわれた近代固有のあり方，『近代家族』と『子育て』の関係性を通して『近代家族』とは人々にとってなんであったのかを探りたい」（３頁）というものだ。また，「子育て」という語が書名に冠せられているのは，近世に用いられていたこの語が，近代家族の出現にともなっていったんは「育児」「教育」「家庭教育」という言葉にとって代わられたものの，近代家族が広く大衆化したとされる1970年代半ば以降に復権した（３頁）ことの歴史的意味が重視されているからだ。

Ⅱ　歴史学のテーマとして近代家族を問う

本書の狙いと方法は，「日本における多産多死から少産少死社会への転換の時期，とくに1910～1920年代を中心に，人々の生きる場としての家族の側から，雇用労働と性別役割分担によって支えられた『近代家族』としての『家庭』という家族のありかたと，そこでの子どもへの期待の関係に注目する。その際，手紙や育児日記，育児体験談といった家族のなかに生きた人々自身が残した史料に着目しそれらを歴史的文脈のなかで読み解く」（2-3頁）という著者の言に集約されているが，そこには，評者を含む歴史社会学的観点からすすめられてきた近代家族研究への批判的視点が含まれている。

それは具体的には，「西欧では歴史学のテーマであった『近代家族』の問題が，日本では社会学のテーマとして主に現代の家族問題を分析するための分析概念として受けとめられて」いったために，「具体的な実証を重視する歴史学のテーマとして，歴史のなかでの家族のありかたの一つとして近代家族の問題を追究するうえで，多くの課題を抱え込むことになった」こと（６頁），「しかも社会学では，近代家族論の焦点が，『近代家族』の『定義』や概念，規範についての言説分析に置かれたことから生まれた問題，家族の中にいきる当事者たちが，規範の受け手として，近代国民国家や近代家族により馴致し抑圧される受け身の存在として描かれる傾向を強め」た（８頁）といった点だ。こうした指摘は，批判の対象の一人である評者自身，首肯せざるをえないところ多々だ。それだけに，著者が，

1　近代家族の問題を，そこに生きた一人ひとりの当事者の側から，その生きる現場に根ざし，規範と受け手との関係のなかで読み解く。

2　近代家族規範は，受けとめる側に一つのまとまったものとして受けとめられたわけではないとすれば，女性にとっての妻役割と母役割，男性にとっての夫役割と父役割相互の関係など，規範の構成要素相互の関係性や矛盾を問う必要がある。

3　そうした規範の構成要素の受けとめ方の違いは，世代と性によって構成される近代家族内部の構成員である，女，男，子どもの関係や，構成員相互が抱える矛盾や葛藤と，どのように関係しているのかが明らかにされねばならない。

という三つの問いを掲げて（15頁），実証的歴史学の視点からあらためて近代家族の実態に迫ろうとする意欲に，評者は大きな期待を抱き，実際本書はその期待にたがわぬものであった。

Ⅲ　近代家族を生きる矛盾

本書は，パートⅠ「『家庭』のなかの女・男・子ども──生活世界としての『家庭』に生きる──」と，Ⅱ「『保護される子ども』と『育児』」の２部に大きく分かれている。詳細な目次や内容の紹介を行うのは本稿の任を外れることとなろうし，ディテールの面白さを丹念に味わうのは読者に委ねるのが上策であろうから，やや偏った紹介になるのを恐れずに評者にもっとも印象深く思われた点のみをあげていくこととしよう。

パートⅠでは，主として，三宅やす子・恒方夫婦の家族生活から，夫婦双方と子どもである三宅艶子の語りが突き合わされ，「家庭」という空間がどのようなものであったかが明かされる。三宅やす子は，昆虫学者で農商務省技師であった恒方と1910年に結婚，夫の死（1921年）後，家庭や婦人に関する多くの小説や評論を著した女性文化人である。著者は，やす子の著作から，夫が存命中でやす子が専業主婦として家庭生活を営んでいた期間，やす子が近代家族の主婦役割規範を内面化しようとしながらも，夫が求める伴侶としての妻役割には同一化できず，子どもたちの母としての役割に自己実現の道を見出そうとしていた苦悩を，他方，恒方が遺した随筆や書簡からは，近代家族の伴侶としての理想を実現しようと妻に慰安を求めるが自分より子どもを優先する妻に不満を感じ，妻子を扶養する稼ぎ手としての役割と学者としての自己実現の矛盾に苦しむ夫の姿を浮かびあがらせる。こうした事実から，近代家族の内実は，それを生きる夫と妻とでは乖離や齟齬が伴っていたものであること，一家の稼ぎ手としての夫／父親役割は，被雇用者として自由を譲り渡すものであって，近代を生きる男性にとって葛藤を伴うものであったことがわかる。著者の狙い通り，近代家族を生きる側の視点に立つことで見えてくる発見である。

Ⅳ　捨て子と親子心中

パートⅡからもさまざまな発見と示唆を得たが，そのうちとくに興味深かったのは，捨て子と親子心中にかかわるものだ。

親子心中は大正後期から昭和初年にかけて増加，他方，捨て子は減少していく。これについて著者は，岩本通弥『混沌と生成』（雄山閣出版，1989年）の，かつての日本の家から近代家族へという「家の構造転換」が子育てはすべて血を分けた生みの親の責任という観念を作り出し，また親子は運命をともにするものとして，捨て子ができにくいされにくい状況が生まれて親子心中を増加させていったのではないかという説を興味深いとしながら（147-148頁），さらにデータを詳細に検討する。著者がそこに見出すのは，親子心中を選ぶ親と捨て子を選ぶ親との間の階層差と心性の違いである。著者によれば，親子心中を選んだ人々は性別役割分担家族としての「家庭」を形成する人々，捨て子を選んだ人々は都市下層にあって世帯を形成したものの，それを維持できない人々であった。親子心中を選んだ親たちは，子どもの保護を他人に委ねる捨て子を選択した親たちに比べ，子どもは「家庭」で保護されるべきという規範に縛られた人々であった。このように，大正中後期から昭和期にかけて子どもへの意識や子育てをめぐる状況は重層的だったのだ（155頁）。

この点について著者はさらに，柳田国男を引きつつ，親による子どもの私物化の果てに母子心中があり，近代の子どもたちは，間引きや捨て子が存在していた時代の子どもたちに比べ，人々の交わりのなかで育つ機会を失い，社会の子としての子どもの生存権はむしろ近代社会のなかで弱まっていると指摘している（158頁）が，これは現代にも通ずるところだろう。

Ⅴ　母性愛イデオロギーの表裏

母親の子に対する情愛が強調されるのが近代家族の特徴の一つだが，日本もまた例外ではない。この時期，教育学者や心理学者により，「母性愛」に大きな意味を求める論が盛んとなったが，著者はこの点にも分け入っていく。

母性愛論は，有性の生物界一般における雄と雌の生理的差異を根拠に，女性の役割は「子を産み母となることにつきる」，「母は子の外には何もない」とするもので，「科学」の装いをまとって女性に母役割を自然・必然として強要，その影響は今日にも及ぶ

と言わざるをえない。しかし，母性愛論が版を重ね多くの読者を得たのは，当時の母親たちによって母性愛論が，自らの育児への権限を強める点で魅力的であったからにほかならないと著者は指摘する（174頁）。というのも，性別役割分担にもとづく新中間層の家庭形成にあたっては，女性の自立は，まず母親としての地位の確立という形で実現されねばならなかった（194頁）からだ。姑らと対立しようとも，女学校や教育書を通じて得た知識によって子どもや育児に対する理想や計画を育み，「自分の思い通りにわが子を育てる」と言い切る女性たちは，自分の思い通りにできる唯一の存在としての強烈なわが子意識をもち，彼女たちにとって育児とは，子どもと一体となっての家からの解放の実現であった（195頁）。これを著者は，近代家族における女性たちによる「産育権の確立」と呼ぶが，それは共同体が生み出した育児文化の否定につながるものでもあった（195頁）。

「良妻賢母」教育について，女性に対しての「伝統的」な抑圧とみなされてきたものが，実は近代に生まれた新たな規範であること，女性にとって地位向上の道でもあり女性たちがむしろ望んだことはすでに議論されているが（小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房，1991年，拙著『戦略としての家族――近代日本の国民国家形成と女性――』新曜社，1996年ほか），著者はここで，母性愛のイデオロギーの構造もそれと同種であることを細部にわたって説得的に論じている。鳩山春子と並んで近代日本初の母親による育児・教育論を著した田中芳子の，長男の成長を記録しグラフ化した「発育表」（195頁），教員の妻・柴崎ゆうの育児日記（『我が兒の生ひ立ち 愛撫八年』1917年）での「我が兒」が数え年３歳のときに歌った童謡の舌足らずの歌を忠実に写し取った記録など，著者が提示するディテール（174-175頁）に興味は尽きない。

Ⅵ　近代家族とジェンダー

以上のように多くを学ばせてくれる本書であるが，評者としての任務から，あえて一，二の疑問点をあげてみたい。

まず第一は，著者は「匿名の父母たちの多様な生活と，その生活内部から生まれてくる子育ての系譜をも含め，日常生活史としての子育て史が明らかにされねばならない」（123頁）と，近代家族の「内側」からの歴史的事実を把握すると，きわめて的確な問題提起を行いながら，用いられる史料の重点が，鳩山春子や三宅やす子夫婦，鈴木三重吉，富本一枝などの子育て，しかも彼らの語る理想や規範をたどったものにあることだ。特定の知識人の育児日記などで「生きる場としての家族」のありようははたしてどれほどとらえられるだろうか。

しかし，この疑問は，素朴すぎる問いだろう。著者が狙いとしたのは，まさにそうした層の子育て意識・家族のありようをとらえなおすことだったのではないか。当時の平均水準を大きく超える教育を受け都市で俸給者としての生活を営む夫とその妻，しかも西欧から移入された教育論や家族論を積極的に受け入れようとする，つまり，「近代家族」を意図的に生きようとする人々の，家族に抱いていた理念と，葛藤する現実を明らかにしようというものではなかったか。著者の用いた史料が限定的であるのではなく，「近代家族」はそれらの層にのみ，しかも規範としてしかありえなかったのではないかという可能性のほうが考えられるべきだろう。

著者も踏まえている通り，この時期，夫が被雇用者で妻が専業主婦である性別役割分業の可能な都市生活者が一定の層をなすボリュームに達したという事実からすれば，日本の近代の都市においては，多様な生きられる家族像があっただろう。都市の家族であっても，祖父母や傍系親族，女中などの奉公人を抱えた世帯は多かったであろうし，著者自身が析出しているように，夫婦の伴侶意識などはほとんど意識されず母子の関係が中枢をなす家父長的家族（家父長制は，男系中心であるがゆえに，その犠牲となる母に対する子の情愛を深める装置でもありうることを評者は前掲拙著で指摘した）もまた，日本近代の家族の一つの典型的な心性だったのではないか。近代家族という抽象概念をいったん離れ，さらに多様な方法論による，日本近代の家族史研究が大いに俟たれるところである。

後続の研究者への注文も含めてという観点から本書評にもう一点付け加えるなら，近代家族論にさら

にジェンダー研究の視点を生かしていくことだ。近代家族は，男性＝稼ぎ手，女性＝家事育児の担い手，という性別役割分業を一つの特徴とするが，そうした性別役割規範へ着目することだけが「ジェンダー視点」なのではない。ジュディス・バトラーやジョーン・スコットなど，ポストモダン・フェミニストらの見解を踏まえるならば，近代家族の政治性は，男女の性別役割分業や公私の分離といった事態の背後にある。すなわち，近代以降の社会においてなぜ夫婦という男女の結びつきが普遍的に家族の核に存在することが必然となったのか，そうした家族が外部に対する排他性を強め子育てや再生産の責任を一手に担うことになったのはなぜなのか，そうした家族のありかたがそれ以外の結びつきが想像もできないくらい自然なものとして人々の人間関係を規定していることの意味は何なのか（拙著『ジェンダー家族を超えて──近現代の生／性の政治とフェミニズム──』新曜社，2006年，）──それがまさに，近代以降の家族をめぐるジェンダーの罠だ。端的に言うなら，近代の家族を問うには，家族が夫婦と子どもよりなるものとする自明の前提をこそ，問う必要があるのだ。

本書において著者は，夫婦の関係に焦点を当てたパートⅠは言うまでもないが，子育てを中心としたパートⅡでも，近世における地域ぐるみの子育て思想の消滅を論じた山住正巳の研究をひきつつ，「子どものいのちをはぐくみ育てる営みは，家族だけの営み，まして母親だけの営みではなかった」と述べているが（245頁），そこにはすでに，家族=夫婦と子ども，という前提は自明で，夫（父親）と母親の子育てにのみ議論を限定しているように見える。日本近代の新中間層の生きられた家族を明らかにするには，まず，その「家族」のメガネを外してみる必要があるのではないか，それによって，日本の近代家族の様相がはじめて明らかになるのではないか。

以上，興味深く刺激的な著者の論考に惹かれるあまりに，ついつい注文を出してしまったが，本書の価値は，近代家族をあらためて歴史実証的な研究の側にとりもどすという重要な問題提起を行い，着実にその歩を進めたことだろう。評者が上に述べた注文は，むしろ本書に刺激を受け後続する近代史研究者に委ねられたことに違いない。そうした刺激を十分に提供している書であることを確信している。

（吉川弘文館，2013年３月刊，A5判，273頁，4500円）